

玉依姫の靈言 (2016年5月15日靈示) 担当:石田昭 2016年10月15日

- 1 玉依姫は「葵祭」(上賀茂神社、下鴨神社、)の祭神。徳川家「葵の御紋」が入っている。
- 2 玉依姫には「二人いる」説。姉が豊玉姫、以前は咲也加さんが豊玉姫と言われていた。
- 3 豊玉姫の「水中出産」説、夫に出産を見られ、恥ずかしくて里に帰ってしまう。生まれたのが鶉菫草葺不合命、妹の玉依姫が育ての母となり、後に妻となる。当時近親結婚あり。
- 4 玉依姫の第四子が神武、東征途中で長髓彦に破れ、兄の五瀬命も亡くなり、伊勢方面から、上陸して勝利。「太陽信仰」の起源、以前から存在したが、「天照信仰」が確立した。それ以前は「天照信仰」と「月読信仰」あり、「月読神社」が破壊されのは、持統女帝の時。一神教形式
- 5 八咫鳥に姿を変え神武を先導した人物の娘説あり、賀茂一族の伝説だが、描写しかねる。
- 6 以下靈言：二説あるが、最初の方が正しい。「依り」は、「豊玉を助ける」という意味。賀茂家とは血縁関係があったと思われる。東征で亡くなった兄弟と建御雷の娘との婚姻？
- 7 賀茂神社に八咫鳥、玉依姫信仰が残るのは、奈良側ではなく九州神武側に協力した象徴。
- 8 玉依姫は日本神道の「巫女職の総本山的な位置づけ」にあたる。家康として転生には驚き。
- 9 豊玉姫(青木職員)は竜宮界に縁あり、玉依姫は日本各地に現れているんな仕事をしている。木花開耶姫(富士山の祭神)などとも、一緒に仕事をする。家康臨終の地駿府城？
- 10 姉(豊玉)は調和の人、妹(玉依)は調和と進歩にかかわっている。ギリシャにも関係
- 11 美しさを磨くポイント 信仰心 女性としての作法 外観のコーディネート 美しさを見る鑑定眼
- 12 神武を育てた男子教育について。普通は両立しないものを両立させる日本文化の素晴らしさがある。「神の強さ」と「美しさ」の体現、ここに天皇制の始まりもある。いかに立派な地位、名誉を得ても、この世は仮のもの「あの世に帰って本来の姿に戻る」という無常観を教えなければいけない。また、「精神的に強い人間」「困難を乗り越えてこそ、道は開ける」こと、要するに「忍耐の心」「華美に流れず、過剰に流れず、徳ある人間になること」昭和天皇がマッカーサーに与えた「衝撃、命乞いに来るのかと思ったが、違い、「神の姿を見た」
- 13 「天皇家は沖縄の伊平屋島から始まったという説」があるが？地理的に沖縄かどうかははっきりしないが、当時は民族が違うという意識はなかった。フィリピン、ベトナムまで交易があり、(ムー)文明の名残があった。太平洋の島々までつながっていた感じがある。
- 14 先の大戦は「ムー文明の復活なのかな」と理解していた。「日本」という意識は昔からあった。神武のときに統一されたが「日本合衆国」という意識、中国の歴史とは同じものではない「海の民としての意識」を強く持っていた。プレートテクトニクス論破の必要性 習近平であろうと、周恩来であろうと、最終的にわが前に跪かせます。「天照大神の御教えを伝える」p51
- 15 「男性の分け御霊」では、戦に勝ち、国を建てる役(家康)。「鏡王女」額田女王の姉。
- 16 大化の改新は、明治と同じ「大政奉還」。物部氏や蘇我氏の台頭で天皇家の危機、天智天皇(中大兄皇子)を中心の革命。鏡王女は天智天皇の後。鎌足の妻説は否定。
- 17 家康は「学問の力」を信じて取り入れた。「北条政子」に習って「貞観政要」を勉強。
- 18 一神教のキリスト教は日本では危ないと思った。「鎖国政策」は悪く言われることもあるが、「特殊な発展を遂げた」効果あり。咲也加さんが家康の孫の千姫という説があったが、「冷や汗が出る」という意味は？「今は言わない方がいい」。新入職員の靈査で家康を名乗った人、「どうして言ってしまったんでしょうね」今回は調整型ですから、大丈夫です。
- 19 西郷様や竜馬様が徳川幕府を倒してくださったので、新しい時代が始まった。限界が見えてきたので練り直す必要が出てきた。そこで力を発揮したい。慎重で謙虚な言葉はなぜ？